

◆企画名	2024年度ピア・コミュニティ活動報告会
日 程	2025年2月25日(火) 9:40~17:00
場 所	関西大学千里山キャンパス 千里ホール、凜風館
参加者数	学生47人(ピア・サポート32名、研修生4名、本学教職員10名、他大学学生11名、他大学教職員3名)

### 目的

- ・2024年度の活動を振り返り、反省等を共有し今後に生かす。
- ・他コミュニティの活動状況を把握し、ピア・サポート、研修生同士の交流を深める。
- ・他大学との交流、他大学の活動の報告を聴くことで新たな気づきや発見を得て、ピア・サポートの在り方を改めて見つめ直す。
- ・さまざまな大学との交流を通して、大学の枠組みを越えたつながりを形成する。

### 内容

- ・各コミュニティのイベント
- ・ランチ交流会
- ・関西大学ピア・コミュニティの活動報告会
- ・他大学紹介(大阪経済大学、京都大学、神戸学院大学)
- ・他大学交流会(グループで悩みを出し合い、別グループの悩みの解決策を出す)

### 効果

- ・各コミュニティや個人ごとに役割があったことで、自分の役割を通して、成長を感じることができた。また、所属するコミュニティのメンバーの、普段とは違う姿や役割を全うする姿を見ることができた。
- ・全体を通して、それぞれが臨機応変な対応を意識できていた。
- ・他大学同士だけではなく、他コミュニティ同士でも親交を深められた。
- ・報告会での質問に対して、昨年度と比較して代表等がひとりで対応するのではなく、他のメンバーも含めて複数で回答をしたコミュニティもあった。
- ・昨年度の改善点を生かして、リハーサルをしっかりと行つたことで、想定していたスケジュール通りに進行することができた。
- ・昨年度と比較して、活動報告会自体を「やるべきこと」という視点だけでなく、「どうすれば参加者が楽しく参加できるか」など参加者の目線に立って考えながら、準備や当日の運営をすることができた。
- ・事前に交流会での意見発表者が決まっていたため、進行もスムーズに進められたほか、時間削減にもなった。
- ・各団体、各コミュニティの活動概要を知る良い機会となった。
- ・他大学から勧誘や新メンバー募集について参考になる情報を聞き取ることができた。
- ・他大学からの参加者が迷わないように、集合場所に向かう道順の写真を細かく撮って送っていたため、スムーズに集合でき、予定通りの開始時間でスタートできた。
- ・スライドは、少し文字がぎっしりして見えづらかったところはあったが、写真を入れるなどの工夫により分かりやすくできていた。

### 改善点

- 準備
  - ・誰がどの役割かがはっきりと示されておらず、メンバー(特に代表・副代表)がその都度確認しながら運営、準備などを行っていた。
  - ・各種役割が可視化できていなかつたため、不明点を代表等が直接確認していく場面が度々あった。  
→誰がどの役割であるかをすべてのメンバーが把握できるように、表にするなどして可視化する。
  - ・当日に運営メンバー同士でやり取りする方法がなかった。  
→TeamsやLINEなどのチャットでやりとりができるように事前に手配する。
- 活動報告
  - ・質問を打ち切るタイミングに基準がなく、切りづらい雰囲気があった。  
→回答数や時間等で事前に質問を切るタイミングを決めておく。

- ・発表を聞く際にメモをする人としない人でばらつきがあり、資料を事前配布していかなかったので手持ち無沙汰になっている人がいた。  
→事前にメモをする用紙や資料の配布、または準備の呼びかけなどを行う。
- ・質疑応答においてその場で質問に答えていたため、発表者の負担が大きかった。  
→回答時間の削減、回答の精度向上のため、発表用スライドが集まった時に想定質問を運営本部で事前に作成し、回答を各コミュニティで作ってもらう。
- ・進行とタイムキーパー、その他運営メンバーとの連携があまりできていなかつた。  
→前述のように Teams や LINE などのチャットでやりとりができるように、事前に手配しておく。
- ・質問しているピア・コミュニティの学生については上級生が多かつた。  
→質問をより積極的にできるように、事前に後輩に呼びかけを行う、また前述のように事前に質問を想定した準備を行う。
- ・当日に司会等の資料共有が必要となったメンバーもいたことで、結果的に資料の共有に手間取ってしまった。  
→どんな資料が手元に必要かを発表者に事前に確認する。
- ・マイク回しを行う人からは手を挙げている人が見えづらく、結果的に質疑応答に時間がかかってしまった。  
→発表者(質疑応答担当者)が質問者を指名する方が効率的である。
- ・発表する際に原稿を読むのであれば、つまらないようとする。  
→原稿を早めに作り、読み込んだうえで発表の練習を行う。
- ・交流会全体の流れを丁寧に説明してもらったものの、前方のスライドでは表示していなかつたため、時間配分等を確認する術がなかつた。  
→交流会での流れについては、常時スライドで表示しておく。
- ・グループを結合した際に人数が多く、必然的に話せる人とそうでない人に分かれてしまった。  
→ファシリテーターを例年下級生の役割として任せることを前提とすると、10 人以上のグループにおいて、ファシリテーションを行うことは心理的負担が大きい。したがって、グループ分けは 5 人～8 人程度の人数での調整が妥当である。

## ○昼食

- ・昼食の際に、大学ごと・コミュニティごとで固まっている方々もいたため、交流を促進するという意味では工夫が必要であった。  
→昼食の座席配置を事前に決め、他大学間の親睦を深められるようにする。
- ・昼食時間が短く、食べることに集中していてあまり話ができなかつた。  
→キャンパスツアー後の時間が 10 分ほど余っていたため、会話を楽しみながら昼食がとれるような時間配分を検討し、適切な時間で設定する。

## ○キャンパスツアー

- ・ツアー内容についての資料があるとより分かりやすいと感じた。
- ・活動報告会が始まってから自己紹介の時間がなく、キャンパスツアー前に自己紹介をするという流れを他大学の方が提案してくれたが、時間上その時間を設けることはできずにツアーが始まってしまったため、キャンパスツアーをコミュニケーションの機会に活用できなかつた。  
→自己紹介する時間を昼食やツアー前に設けておくことで、よりコミュニケーションがとれる楽しい雰囲気のキャンパスツアーにする。
- ・キャンパスツアーの時間がやや短い印象であったため、来年度もキャンパスツアーを実施するのであれば 40 分程度の時間を確保する。
- ・列をもう少し整備した方が良かった。  
→先導する KU ブリッジ以外のコミュニティメンバーで列を整備する。
- ・列が長く、列の後ろの人まで声が届いていなかつた。  
→後ろの人が来るまで待つか、グループを 2 つに分けて説明を行う。

## 感 想

教室ではなく、千里ホールを使用したことにより、普段よりも格式高い雰囲気のイベントとなった。そのような場所で人前に立ち発表できたことは、大きな自信につながった。

他大学と交流できるようにイベントを考えることも重要だと思うが、会場校の学生として、当日の様子や雰囲気を見ながら、もっと臨機応変に動けるように成長できれば「事前に準備するものや決め事について改善点はあったが、できる範囲でカバーできた」となると思う。ピア・コミュニティ全体として感じることとして、事前にしっかりと準備しておく部分と、初対面の人にも積極的に話しかけ、明るいコミュニケーションをとるなど、当日の状況を見ながらそれが臨機応変に対応する力を各コミュニティが活動を通して身に着けていけるようにできたらなと感じた。

